

夏ダニはほっておけ!

マシン油一回
ダニ剤一回
三カン産地・三ケ日の
ダニ剤減らし作戦

赤石晋一郎



山崎恵嗣さん(右)とJAみっかびの成澤和久さん(左)

「夏のダニ剤はガマンだ」、そんな見出しで今年六月号(二六六頁)で紹介した、静岡県三ケ日町のダニ剤減らし作戦。今回はその続編、渦中にある農家の声を聞いてみた。

六月の散布もやめ
マシン油は一回だけ

「六月のアタックオイルを抜いたことで、ハダニ防除は四月のオイルと、九月のダニ剤の二回だけに減らすことができました」

JAみっかび・生産指導係の成澤和久さんは今年の防除暦の特徴をこう語

る。六月号で紹介した昨年の防除暦には四月と六月上旬にマシン油散布が入っていたが、今年は六月上旬の散布をやめたので、三種混合を避けるために五月下旬と六月上旬に分かれていた散布が一本化できた。

「精神的に楽になったよね」

というのは、数年前から農協の防除暦にそってハダニ防除に取り組んでいる山崎恵嗣さん。これまで、六月には、マシン油とチャノキイロアザミウマや黒点病の農薬とあわせ、やむなく三種混合での散布をすることもしばしば、薬害の恐れがいつもあった。今年はこの不安が解消された。

マシン油一回で乗り切るコツ

でもこれだけで、本当にハダニ対策は大丈夫なのだろうか？

「夏ダニは害虫ではない、という見方ですよ」と山崎さんはいう。試験データや農家の声からも、夏場のダニにつ

安上がりのダニ対策

平成13年度 柑橘防除暦（JAみっかび）

月	旬	温州みかん・ポンカン・清見			
		対象病害虫	使用薬剤	使用倍数	
3	中	前年にカイヨウ病・ソウカ病が発生した園地では、icボルドー66D 60倍を必ず散布する		アタックオイルとの散布間隔は30日以上	
4	中 下	ミカンハダニ	アタックオイル(乳)	100倍	新葉が緑化前にダニに加害されると、悪影響を及ぼすので必ず散布する icボルドー66Dとの散布間隔は30日以上 ソウカ病の発生が見られる場合は、マネージ(水)2,000倍を発芽直後に散布 ケムシ類の越冬幼虫が見られる場合は、ロディー(乳)2,000倍を混用散布 カイヨウ病の心配される園では、スプレースチッカー3,000倍+Zボルドー(水)500倍を散布(アタックオイルとの散布間隔は1週間以上)
5	中(満開期)	灰色カビ病 ソウカ病 訪花昆虫	ポリベリン(水) スプラナック(水)	1,000倍 1,000倍	花を目掛けて散布する 槇の刈り込みを新芽の発芽後に行なうと、槇に存在するチャノキロアザミウマが、園内に飛来するので、この時期以降の槇の刈り込みは行なわない アブラムシの発生が多い場合は、コテツFLをガンバ(水)1,500倍に入れ替える(中晩相には使用しない) Mダイファー・ジマンダイセンでカブレの心配がある人は、エリミノン6,000倍を混用散布 新葉の緑化前にダニが発生した場合は、アタックオイル(乳)150倍を単用散布
	下(落弁期)	チャノキロアザミウマ 灰色カビ病 黒点病	コテツFL スイッチ(水) Mダイファー(水)又は ジマンダイセン(水)	4,000倍 3,000倍 600倍	
6	下	チャノキロアザミウマ 黒点病	アドマイヤーFL Mダイファー(水)又は ジマンダイセン(水)	4,000倍 600倍	前年に、カイガラムシ類の発生が見られる場合は、スプラサイド(乳)1,500倍を混用散布
7	下	チャノキロアザミウマ 黒点病	コテツFL Mダイファー(水)又は ジマンダイセン(水)	4,000倍 600倍	
8	下	チャノキロアザミウマ 黒点病 浮皮軽減	アドマイヤーFL Mダイファー(水)又は ジマンダイセン(水) セルバイン	4,000倍 600倍 300倍	セルバインは、液肥との混用はできないので注意する
9	中	褐色腐敗病の発生が心配される園では、ストロビーDF2,000倍を秋雨前に樹高の半分以下に予防散布する ミカンハダニ 浮皮軽減	バロックFL セルバイン	2,000倍 300倍	ウスカワマイマイの発生が見られる園では、株元にナメクグリーン(粒)2kg/10aを散布 チャノキロアザミウマの発生が見られる場合は、アドマイヤーFL4,000倍を散布 黒点病の発生が心配される園地では、Mダイファー(水)又はジマンダイセン(水)800倍を散布
10	下	10月上旬～10月中旬に、カメムシ、ミドリヒメヨコバイ、ケムシ類の発生が見られる場合は、ロディー(乳)2,000倍を散布する			ミカンハダニの発生が見られる場合、カネマイトFL1,500倍を散布 カイガラムシ類の発生が見られる場合は、スプラサイド(水)1,500倍を散布 腐敗防止剤は収穫1週間前を目安に散布し、散布後3週間以上、又は、100mm以上の降雨となった場合は、再び散布
		早生の腐敗防止剤 浮皮軽減	ベフラン(液) ベンレート(水) セルバイン	2,000倍 4,000倍 300倍	
11	中 下	青島の腐敗防止剤 浮皮軽減	ベフラン(液) ベンレート(水) セルバイン	2,000倍 4,000倍 300倍	収穫間際にミカンハダニが発生したら、パノコン(乳)1,000倍を腐敗防止剤に混用散布 清見は腐敗防止剤の散布は必要なし
12	上	ポンカンの腐敗防止剤 浮皮軽減	ベフラン(液) ベンレート(水) セルバイン	2,000倍 4,000倍 300倍	
1	上				収穫時にカイガラムシ類、ミカンハダニの発生が見られた園では、収穫後にアタックオイル(乳)60倍を散布

いてはミカンの品質に問題がないという結果がでている。そこでダニの密度の増減に関係なく、害がある時期だけ防除すればいいという結論になった。

防除が必要なのは開花し、葉が緑化する五月から六月はじめの時期。それと収穫前の九月から十一月だ。この時期だけは、ハダニをのさばらせておく。葉の緑化が遅くなったり、果実の色が悪くなるというハッキリとした害がある。逆にこの時期だけ抑えておけば、あとはハダニ君、自由に吸いたまえ、というわけだ。

では実際の防除のポイントはどうなのか、山崎さんに聞いてみた。

まず緑化前の四月にマシン油をうつ。それも花が咲くまでギリギリの四月下旬がいいそうだ。

「これは六月にオイルをやらないための、凄いポイントだ」

と山崎さん。マシン油のハダニへの効果はおよそ四〇日から五〇日。ギリ

ギリまで粘る理由は、マシン油一回だけで緑化が終わる時期までを乗りきるためである。

そしてもう一つのポイントは、散布後三日間は晴れそうな日に散布すること。散布後に雨でオイルが流れると、効果が落ちるからだ。

「ダニの卵が呼吸を始めるのは三日後。だから、少なくとも三日間、卵にかかったオイルをもたせられれば生き残る卵がグツと減る」と、成澤さんは卵からみた「三日間」の意味を補足してくれた。

六月のマシン油を避けたいのは、マシン油散布が生理落下を助長するという懸念を、どうしてもぬぐえないからだ。と山崎さんはいう。データがあるわけではなく、あくまで農家の感覚だが、これについて成澤さんはこう話

す。「基本的にマシン油を使っても、温度が上がらなければ影響ないと思っ

すよ。三〇度が頻発するような時期だとアブナイだろうという感じはしますね」

どうやらマシン油による生理落下の助長は、温度の関係にあるらしい。最近温暖化で、六月でも暑い日が多い。その意味でもマシン油は四月だけ、というの、大きな価値がある。

ダニ剤は秋の出始めに一発

ダニ剤を使うなら、抵抗性をつけるために、一年に一回がベスト。効くダニ剤は高い（パロックは五〇〇ccで八〇〇円もする）し、大事にしたいところだ。そこで夏ダニはほっとけ、ということになる。

「夏にダニのピークをつくったほうが、ダニが弱くなるので、秋のダニ剤の効きがいい」

山崎さんがダニ剤を使うのは夏のピークが過ぎ、そろそろダニが出始める秋口ころ。いまはパロックが効いてい



JAでは管内に無散布、マシン油散布区などの調査樹を設置し、ハダニの密度を調査している。去年の無散布区では、夏ダニの発生も多かったが、その後の減り方も大きく、実質的な被害はほとんどなかったという

と成澤さんもいう。試験場でマシン油すらやらないハダニ対策ゼ口の樹でも、ミカンの品質には変わりがなかったという結果がでていそうだ。

「果皮の養分がダニに吸われて、秋にちよつどよくなるんかね」と山崎さんは推測する。浮皮防止はあくまで、そんな傾向があるという話だが、夏ダニをほっておくことに踏み切る一因でもあった。夏ダニはほつとけという三ヶ日の防除方法は、いまや静岡全域でも常識になりつつある。

るので、これを一発。夏ダニをほっておくようになってから、九月にダニ剤を使い、収穫前の十一月にまた別のダニ剤を使うということもなくなった。しかし、試験データでは品質には影響がないといわれても、農家にとつて夏ダニをほっておくというのはどうも落ち着かない。ダニに吸われた葉を見ると、霞んだような緑色になっている。もしかすると光合成に影響があるかもしれない。「マシン油はやりたくないが、ダニも

いないほうがいい」と山崎さん自身も複雑な胸のうちを語る。ダニを徹底防除する農家も、そうした考えを拭えないからかもしれない。そこで、山崎さんはバランスを考え、マシン油をうつとときに液肥やマグネシウム剤を混ぜることで樹にプラス要素を与える。マイナスの懸念があるなら、プラスで埋めようという考えだ。

「ハダニで浮皮が減る?!」逆に、ハダニには利点もあるという、まさかと思うような話を山崎さんは声をひそめながら教えてくれた。「ダニに吸われたミカンは、浮皮になりにくいんですよ……」おおっぴらにはできない話だが、ハダニ浮皮防止説は農家のなかでは広く認識されていることだという。浮皮のミカンは評価がワンランク以上も下がる。浮皮防止には今のところ、確実な技術がない。